

# 花 き

## 実 況

### 1 キ ク

奥越地域の積雪量は、平地がほぼ消雪、勝山山間部で30cm程度の積雪がみられ、消雪した圃場から3月上旬より不織布被覆が行われている。春の管理開始に合わせて、JAテラル越前キク部会の研修会が3月14日、越の花生産組合が3月4日に行われた。和泉等の山間部では70cm程度の積雪があり(3月中旬)、春作業はやや遅れる見込みである。春植えギクでは親株育苗ハウスで採穂が3月25日前後に行われ、4月中旬に定植される。

あわら市では無加温ハウスで採穂、挿し芽が行われている。一部のハウスでは5月咲きにトンネル被覆による促成栽培が行われている。3月上旬に被覆が外された。5月下旬咲の「さきかぜ」で草丈22cmで、生育が良い。

福井の平坦部では、春植え8月咲きギクの定植が4月上旬に行われる。アブラムシ中発生、福井市大土呂では白さび病が多発である。

丹生では、「小鈴」「翁丸」「めぐみ」等を3月上中旬に挿芽、白さび病が多発、アブラムシ類が中発生である。

越前市では7月咲品種を3月中旬に挿芽開始し、親株には白さび病多発生である。

二州地区では4月上旬、若狭地区では3月下旬から挿し芽を開始し、4月15日頃の定植を予定している。

### 2 ユ リ

春江では、3月中旬にかけて「リッチモンド」「ランデーニ」「ベルメール」「ブラックアウト」等の球根が定植された。

あわら市のシンテッポウユリは1月20日播種で、子葉が4~6cm、4月下旬定植予定である。

大野市のシンテッポウユリは1月19日播種、子葉が2~4cmであり、4月下旬定植予定だが生育が遅れている。

### 3 トルコギキョウ

あわら市の「レイナホワイト」の2度きり栽培が行われているが、まだロゼット状態(3月15日現在)で、昨年より生育が悪く、葉数18~22枚程度である。生育や開花は平年並みになる見込みである。

南越地区では、9月中旬播種、11月定植の作型で、草丈8cm、本葉6~7対(8対)である(本年3月14日、昨年3月18日調査)。二度切作型の側枝は3cm程度である。



写真1 挿し芽作業(あわら市)



写真2 6月咲ギクの生育(あわら市)

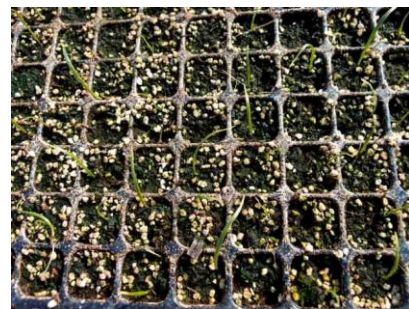


写真3 シンテッポウユリの育苗状況(あわら市)



写真4 トルコギキョウ二度切株の状態(あわら市)

二州地区の11月中下旬定植の品種は、「あすかの吹雪」「ブルーピコティ」「プラチナキング」等が植栽されている。「ミンクマリン」は冬季ほとんどの株が枯死した。「ミンク」系、「なみだ」系は新潟県の報告でも冬季株枯の報告があることから、耐寒性が弱いと推定できる。葉数3～4対、「あすかの吹雪」「ブルーピコティ」は抽苔開始である。

若狭の8月咲き作型は3月上中旬より播種された。

#### 4 ストック

坂井北部丘陵地は一戸のみで、3月下旬まで出荷が続く見込みである。「アイアンホワイト」で87cm、開花盛期である(3月15日現在)。

南越地区では9月中旬播種の「カルテット」シリーズが開花盛期、3月14日調査で草丈87cm(昨年3月15日調査、本年14日調査)である。

若狭では、3月15日調査で「カルテット」シリーズが11月上旬定植で草丈35～40cm、病虫害はコナガが少発となっている。



写真5 ストックの開花  
(あわら市)

#### 5 その他

あわら市の「サンリッチ」シリーズは、3月上旬から断続的に播種、5月から出荷予定である。キンギョソウの「アスリート」シリーズは4月から出荷予定、デルフィニュームは4月から出荷予定である。



写真6 キンギョソウ  
(3/15)

### 対 策

#### 1 キクハモグリバエ類とカブラヤガの防除

- (1) ナモグリバエは4～5月にキクの暮れ植え栽培の株や、葉肉の厚い品種に発生するため、薬剤防除を予防的に行なう。例年被害が目立つ品種は、オルトラン粒剤(ハモグリバエ類に登録有)、スタークル顆粒水和剤(ハモグリバエ類に登録有)等を用いて、前もって防除する。
- (2) 5月まではナモグリバエ、6月以降にマメハモグリバエが発生し優占種が変わるため、多くの種に効果がある薬剤を選定する。特に4月が温暖な場合、ナモグリバエの発生が多い可能性がある。浸透移行性のあるダントツ水溶剤(ナモグリバエ、ハモグリバエ類登録有)、アクタラ顆粒水溶剤(ハモグリバエ類)、ジェイエース水溶剤(マメハモグリバエ)を組み合わせる。
- (3) ハモグリバエ類の幼虫が入った葉は二次発生と黒斑病や他病害の原因となるため、下葉かきをかねて除去する。被害がひどい場合は、落とした下葉も圃場から除去する(ナモグリバエは葉中で蛹になるため)。

- (4) 新芽が食害により倒れる場合はカブラヤガの存在が疑われる。捕殺するかカルホス微粒剤Fを地際に処理する。基本的に接触毒であるため、植物の株元処理か、幼虫が触れやすいように軽く混和する。

## 2 キクの挿し芽作業

- (1) 採穂の1～2日前に親株の病虫害防除を徹底する。芽の伸長初期には、保護殺菌剤、有機リン剤等の散布により、アザミウマ類や白さび病防除を徹底する。
- (2) 採穂時間はしおれやすいため、早朝に取るのがよいが、極端に露が多い時間帯は避ける。
- (3) 摘心した親株から採穂する。極端に太く生長したものからは採穂しない。挿し穂は手で摘み取り、展開葉3～4枚をつけ、長さ5～7cmに調整する。
- (4) 挿し穂は冷蔵すると挿し芽後の生育がそろい、エスレル10の効果も向上する。冷蔵する場合は、発泡スチロールの箱に、挿し穂の切り口を下にして1列に並べて詰め込み、5℃の冷蔵庫に7～10日、2℃で2週間まで冷蔵できる。
- (5) 軽い挿し芽用土は作業性がよいため、パーライト5+クンタン5、バーミキュライト5+ピートモス5等を用いる。
- (6) 土詰め後の用土は十分に吸水させておき、はし等で深さ2cmくらいの挿し穴をあけるようにする。
- (7) 挿し芽間隔は葉と葉がわずかに触れ合う程度とする。間が空きすぎると活着が遅れる。挿し芽後十分にかん水し、挿し穴が塞がれるようにしておく。遮光下の暖かい棚上に置き、10日目以降少しずつ遮光をはがしてゆく。温床上で14日、無温床で20日で苗ができる。



写真7 冷蔵中の挿し穂

## 3 トルコギキョウの管理

- (1) 定植後は、活着と初期生育を促進させるため、根が張るまで十分に灌水する。特に、花のボリュームを出すため、花芽分化が始まる本葉8対（草丈が15～20cm）頃までは水分や肥料を十分に与える。二度切り栽培は、草丈が10～20cmに達した時点で、生育が良い枝を2本程度残してその他の枝を取り除く。多く枝を残すと、花のボリュームが出ない上、ネットと枝が邪魔で収穫がしにくい。
- 上葉が小さくなるうらごけがみられる場合は、圃場排水に努め、生育状況をみながら、液肥を施肥する。葉先枯れが出やすい品種はカルシウム入り液肥の葉面散布を行うとよい。
- (2) 春植えは、活着後の生育の状態を見ながら液肥（OKF-1の500～1000倍など）を中心に追肥する。
- (3) 定植後に生育が停滞し、葉が淡黄色になって枯れる場合がある。これは主に塩類濃度（最適EC0.3～0.5mS）が1.0mS/cm以上と高い場合に発生する障害の可能性があるため、圃場準備の際には土壌分析を行い、施肥量を調節する。また、ECの値が高い場合は、定植前に水をかけ流したり、床の表土を削り落とし、塩類を除去する。
- (4) 土壌酸度が低い時も同様な障害が発生する。pHは6.5前後がよく、酸性土壌ではマンガン過剰の症状、上位葉先端や周縁部に黄白斑点、新芽の萎縮が見られる。1㎡あたり深さ10cmの土壌のpHを1上げるのに必要な石灰資材は粘質土で120g、砂質土で80



gとされる。そこで、対策としては薄い石灰水（消石灰等の石灰資材を100g／水10ℓに溶かす）10ℓを3㎡に土壤施用する。効果が不十分であれば再度施す。

- (5) 立枯病はフザリウム菌とピシウム菌によるものが主である。フザリウムの病斑は灰白色粉状のかびが密生する。耕種的防除として過湿を防ぎ丈夫に育て、発病株は、抜取り焼却する。
- (6) 葉先枯れ対策には、日中の換気を十分行い、軟弱徒長にならないように管理する。雨や曇天が続いたあとの好天で発生しやすいため、雨や曇天の日は、扇風機や暖房機の通風運転で施設内の空気を常時動かすようにする。また、降雨によるハウスサイドからの雨滴で灰色かび病や立枯れの発生が助長されるので注意する。

#### 4 ヒマワリの播種と育苗管理

- (1) 天幅90cmの50m畝では約2500～3000本の苗が植わるので、種子量は5dl（約4000粒）必要である。
- (2) 200穴のセルトレイに播種する。種子は横向きに並べ、種子が隠れる程度に覆土する。覆土後は新聞紙で覆い、十分灌水する。
- (3) 発芽温度は、20℃以上（発芽適温26℃）を確保する。低温で発芽揃いが悪くなると、その後の生育にも影響する。放射冷却で低温になる時は不織布をベタガケする。
- (4) 3～4日で発芽が始まるので、新聞紙を取る。発芽時に子葉についている種皮が取れないようであれば手で取り除く。
- (5) 若苗定植が原則なので、最初の本葉が展開した頃（播種10日後）に遅れないよう定植する。
- (6) 早生品種は4月下旬播種で6月中旬に開花する。「サマーサンリッチパイン」「マンゴー」「オレンジ」の順に開花する

#### 5 スイセンの春以降の管理

- (1) コンテナ栽培のスイセンはハウスの外に出し、朝日が当り、夕日が当たらない半日日陰の場所に移す。ハウス栽培のスイセンは気温が20℃程度に管理できるように、日中はハウスを開放する。できるだけ葉を成長させて、切り下球の肥大を図る。灌水は適宜行い、土壤が湿っているように管理する。極端な乾湿は避ける。
- (2) 5月下旬までは十分に光合成をさせて、球根の肥大を促進する。
- (3) 6月上旬ぐらいに地上部が3分の2程度枯れたら、掘り上げ準備を行う。その時に残った茎をつけたまま掘り上げ、風通しの良い日陰で乾燥させる。